

令和7年度第1回高知県地域学校協働活動推進委員会 会議要旨（各委員まとめ）

1. 日時 令和7年11月6日（木）14:00～16:00
2. 場所 高知県立塩見記念青少年プラザ 5F 多目的室
3. 出席者 委員8名、事務局4名 ほか14名
4. 議事
 - （1）令和6年度実績報告及び令和7年度中間報告
 - （2）協議テーマ
「子どもの「確かな学力、健やかな体、豊かな心」の育成に向けたコミュニティ・スクールのあり方について」

5. 議事概要

委員長の議事進行により、以下の事項について、事務局から説明が行われた。委員からの主な意見のまとめは以下のとおり。

（1）令和6年度実績報告及び令和7年度中間報告についての説明

【委員】

大方高校の学校運営協議会に私も参加しているのだが、年に2回、学校の先生が進行して地域の方が答えるような流れで行われているので、形骸化の面で考えるとどうなのかなと思うところはある。

全市町村に、学校運営協議会（コミュニティ・スクール）が設置されたとあるが、実際、どの程度機能しているのか。

【委員長】

昨年度より、高知県においては学校運営協議会の設置率が100%になったが、どの程度機能していると評価されているか。

【小中学校課】

全てを把握しているわけではないが、年間2回～3回の学校運営協議会が開かれていることは聞いている。

【委員】

多くの施策の中で、実効性を担保していくかはとても大変なことだと思う。濃淡をつけ、後追いや見届けの仕組みをどのように今後取り組んでいくのか。全ての事業において起こりうる話であるので、やってみたが、実際はあまりできていないこともあると思う。そのあたり、どのように取り組んでいくのかを聞きながら感じており、答えづらいとは思いますが、問題意識としてある。

もう一点、教職員の参加についてあったと思うが、当事者である教職員に、いかに主体性を持って取り組んでもらうかということになる。教職員も忙しいので、あれもこれもはできない。そこで、事業をプラスする前に、無くす、減らす、削る、移すことを行わないと、良いプロジェクトだと思っていても行動に起こすことは難しい。業務の洗い出し、タスク整理をし優先順位をつけて取り組むことが、民間でよく行われている手法であるので、今後どのように取り組んでいくのか伺いたい。

【委員長】

学校における、教職員が担っている業務、いわゆるスクラップアンドビルドの部分で、増やす前にま

ずは減らしたり、移したりといったことだが、事務局で把握している課はあるか。本庁各課や教育事務所の方々に、学校訪問を行っている中で、スクラップアンドビルドを積極的に行っているような学校の事例などあったら、教えていただきたい。

【委員】

高知県の中心部に近い、土佐市の高岡中学校の事例を紹介させていただく。主に学校運営協議会の話になるが、キャリア教育を中心にサポートしている。地域から講師を集め、職業講話を年に2回行っており、少ない時で20人ぐらいで多い時には30人ほど講師を呼んでいる。生徒のリクエストに応えるため、ゲームやアニメのクリエイターに来てもらいたいといった要望があるが、今のところは全部実現している。県外からも呼んではいるが、高知県の方が多い。講師として来た方は、次の年にもまた来たいと言ってくれる。サポートと言うよりは一緒に育てていくといった雰囲気、生徒の反応も良い。講師も自分の勤めている会社にいずれは来てもらいたいといった気持ちを持っている方もいる。

学校の取組から離れて、地域の中で、チーム高中（たかちゅう）といった組織が勝手にできている。様々な腕利きの職業人ばかりではあるが、何ができるか話し合っていく中で、学校の中でキャリア教育だけではつまらないので、帰りに気軽に寄れるよう、町中でキャリア教育したらいいのではないかといった意見もあった。去年は課外授業で自分で受け持つといった話も出ていた。チーム高中については、学校と連携しているわけではないが、学校運営協議会が受け持ち、そこからボランティアの人という扱いにしている。リアルなキャリア教育ができている中では、受け入れ側も楽しんでいる。このような取組を行っている、仲間も増えていく一方でメンバーが集まりづらいいといった話もよく耳にするが、そうでもないと感じている。このような取組を6年間ぐらい行っていると、希望の職種についた生徒たちが現れ出した。個人的に警察学校にワークショップに行った際、高岡中学校の校内ハローワークを通して警察官を目指していた女子生徒がおり、「次、私が校内ハローワークの講師で行きますので呼んでください」と言われた。知らぬ間に、若い世代の担い手を創出することができはじめている。

教職員の参加が少ないことについて、本校だけの事例になるかもしれないが、教職員を引き寄せようと思って取り組んでいる。例えば、高岡中学校を卒業し、農業高校へ行った生徒と一緒に耕作放棄地を使って農業をしながら物を作ってみようというのがあるが、販売も行うので結構楽しい。割とワクワクするようで、東京の、二ツ星や三ツ星レストランからも買い付けてもらっていたので、小学校の先生や中学校の教職員と一緒にやりたいと興味を持ってくれる方がいる。先生のバッチを外した状態かもしれないが、地域活動一緒にやってもらったりもしている。地域学校協働本部の話ではないのかもしれないが、親御さんと一緒に、ご飯を食べる仲になったケースもある。

【生涯学習課長】

委員からの話は、新たな事業を始める際、スクラップビルドがないと、教職員の仕事は溢れているので始めることができないということだと思う。

現在、我が県だけではなく、全国共通で給特法の関係や労働時間管理の問題も含め議論をされている。中教審の学校・教師が担う業務に係る3分類で、「基本的には学校以外が担うべき業務」、「学校の業務だが、必ずしも教師が担う必要のない業務」、「教師の業務だが、負担軽減が可能な業務」とあり、具体的にどの部分が軽減できるか議論されている。「基本的には学校以外が担うべき業務」の中に、地域人材との連絡調整についてあるが、地域学校協働活動推進員が上手く活用できておらずお互いのやり取りがうまくいっていない学校においては、調整の負担が教職員に向かっている。今年すぐに事業化はできな

ったが、地域学校協働活動推進員の普段の活動を、伴走支援だけはスーパーバイザーを活用したり、研修をこまめにしたり改善できないかということを考えているので、お示しできる案ができれば、皆様のご意見をいただいて、実行していきたい。

【委員】

文部科学省から、指針が出ないとスクラップアンドビルドできないのでは困ると思っており、自分でどうするかを考えた方が良いのではないかなと思う。上から下りてこないとできないではなく、自分たちの中でできることは何なのかを、もっと考えていくべきだと思う。

どうしても教職員は視野が狭いので、越境できるような仕組みを、県教委の方でもっと作るべきだと思いますし、外に出た教職員が帰ってきて体験したことや学んだことなどを共有することで、相乗効果につながり何か少し変わってくるのではないかなと思う。

【委員】

行政関係として参加しているが、生涯学習課からの説明でもあったように、管理職だけではなく、教職員に地域学校協働本部事業をわかっていただけるような研修の重要性をとっても感じています。4月初めに地教委と教職員の連絡会を行う際に、教職員の方は地域学校協働本部事業のことを知っているだろうという前提で、私は自己紹介で担当していることを伝えましたが、管理職以外の先生は、何のことなのか分かっていないという状態であった。これが、色々な地域での現実ではないかなと思っている。学校の研修は詳しくないが、1年目の教職員の方は多くの研修が入っていると思う。その中で、地域学校協働本部事業や生涯学習の事もこれから学んでいくと思うが、市町村教育委員会としても地域に来てくれている教職員の方に向けて研修を実施することがあるので、その機会を使い、理解していただき、一部の地域だけが地域学校協働本部事業が盛んなのではなく、高知県のどこの市町村に行っても、同じ知識を持った方が、人事異動で県下回ること、若手を育てることにもつながってくる。市町村教育委員会が力を入れてできることとして例えば、教職員の研修会を実施する際に、県の生涯学習課の方に講師として来ていただくなどがあるのではないかと感じた。

【委員長】

県が主催する研修と、市町村が主催する研修がうまくかみ合うように連携ができればより良い研修の機会が作れていくのかなと思う。

【委員】

土佐山学舎は平成27年から学校運営協議会有り、地域学校協働本部もある。教職員全員で29名おり、ALT（外国語指導助手）を除いた27名全員が学校運営協議会に入っている。12、13人ずつが3つの組織に分かれているのだが、3つの組織で、学校としてはこんなことをやりたいので、こんなことを助けてくれませんかというのを、学校が主導権を握ってやっている。カリキュラム表を作っているため、土佐山学という総合的な学習の時間では、私たちは来年こんなふうにしていきたいという、1年生から9年生までの流れを全部で70時間組み立てている。1月頃に組み立てが終わって、3月頃にはプリントアウトしているのだが、それをまず見てもらい、連携教育としてはこのようなことを助けてくれませんかということを、それぞれの3つの部会の中で、何をどうして欲しいのかを具体的に示している。

地域の方も教育者ではなく、仕事をしている方もいる。でも、地域の方が、この内容であればできる

ということ、学校と地域がお互いに腹を割って、話し合うことを大事にしているので、私たちとしては非常にスムーズに地域との連携ができています。そして、資質・能力ベースではないが、子どもたちにこのような力をつけたいということをしっかり話をしている。地域の方に入ってもらうことで、子どもたちが関わってくれている地域の方のような大人になりたいと、米作りであればこの人と思ってもらいたいといったような話をしている。これらのことがベースに、地域の関わりが、自分たちの何に結びついているか理解することで、その自分たちの存在価値をもう1回価値づけをされるということが大事なのではないかと思っている。防災学習を地域と一緒にしたのだが、9年生が3年間積み上げてきて、地域の中山間地域で起こるであろう災害は何かを調べてきた。最後の振り返りで、生徒から土佐山ならではのコミュニティの強さを実感したといった意見が出た。9年間土佐山にいて、土佐山は地域の人がいっぱい来てくれ、助けてくれていると思っていたのだが、そうではなく、「地域自体のコミュニティの強さがあったと言うことが私はわかりました」といった振り返りがあった。大人社会に絆があり、協働してくれ、野菜を持ってきてくれたりする。今日も200人分の、すいとんを作ったのだが、地域の方もたくさん来てくれて、子どもにとっての生きる力や、地域の方にとってのやりがい、お互いにとって重ね合わされる部分が大事ではないかと思っている。

削減という点では、本校では学校運営協議会を年間6回行っている。私が集まって欲しい時には、臨時で来てくれる。今年度だと、臨時が1度あったので、7回になる。その際、「学校でこんなことが困っているのだが、学校運営協議会の方はどうですか」といった話をする。事例として、全ての教職員が会に参加するので、時間外勤務30時間以内を目指すという目標に対して働き方改革の狭間で、18時半頃から学校運営協議会を行っている。このことについて「折衷案を見つけよう」といった意見が学校運営協議会の委員から出てきた。その中で、「8月昼間の暑い時には、柚子を取りに行かんと家にいるので、その時間にやらないか」といった声をもらった。「学校も8月は職員会を行っているので、その日の昼間がいいですね」とか、私たちがともに生きていきやすいやり方を、何でも正直に話せる、そして正直にアドバイスをもらえる、そういう関係が自分たちはすごくできているので、学校運営協議会が楽しいし、学校運営協議会の委員を子どもたちはみんな顔も名前も知っている。

このように、1年生から9年生まで関わってくれた人、最初は名人だと思っていた人が、最後にはこんな大人になりたいと憧れ、そして最後には、この地域のコミュニティの強さ、こんなところにあるということに、子どもが気が付いてくれることを目指している。

その中で企業の方もたくさん助けてくれている。様々な企業の方とも、土佐山学では繋いでいくのだが、生き方に憧れていくことも大事な視点であると思っている。

【委員長】

小中学校課への質問になるのだが、8ページの資料について、令和6年度の第2回推進委員会の話題に挙がり、ある委員から県内の市町村教育委員会や学校にも共有していただける、一つの事例集のような扱いをしてもらえないだろうかという意見が出ていたのだが、昨年度の推進委員会では検討すると、持ち帰りの事案になっていた。別の委員からも、市町村や学校にも共有できるような事例集にしてほしいという意見があった。昨年度は原則公開しないといった回答だったと思うが、その後の検討状況はどのようなになったか。

【小中学校課】

事例集にする事に関しては引き継げていなかったため、確認して報告させていただく。

【委員長】

可能な範囲で検討していただき、何らかの形で回答いただければと思う。関連して、昨年度の推進委員会では、8 ページのフォーマットを工夫できないかという意見もあったが、今でも成果と課題、市町村教育委員会が取り組む内容、一体的推進につながった事例とあるが、市町村教育委員会の職員や学校と関わってくれている地域学校協働活動推進員の方にも、有用な事例集になるような情報をもう少し盛り込んでいただければといった意見もあった。項目についても、改善の余地があったら検討していただきたい。

【小中学校課】

令和7年度のものに関しては、市町村に発出して作成していただいているので、次年度以降になると思う。

【委員長】

年によって様式が変わるのは良くなく、一貫性があった方が良くと思うので、大きなズレがない程度に検討していただきたい。

【小中学校課】

令和8年度以降、少しずつ改良を加えていく形で、検討していく。

【委員長】

資料1の1～3 ページ、資料3の5 ページ～7 ページの研修会に関して、委員のみなさまからご意見、感想等があればいただきたい。

【委員】

放課後子ども教室、放課後児童クラブで困っている状況がある。子どもの数は減少しているが、放課後子ども教室や放課後児童クラブを活用したい子どもの数は増えている状況にある。今年度、枝川小学校の3つ目の放課後児童クラブを新設しており、来年度から運用する。今年度、伊野小学校においては待機児童が出ており、来年度伊野小学校においても第3の放課後児童クラブを作るよう、予算立てを行っている。

現場にいる、支援員の方々について、学校の指導が十分でないため、放課後児童クラブ等で子ども同士のトラブル、いじめに繋がる事案が非常に多い。学校としては、自分たちの指導が悪いといった振り返りは、自分たちの目の前で起こっていないため、難しい。放課後児童クラブで起こった内容であるので、起こった場所で指導しないといけないのではないかと言うのが学校の言い分であり、放課後児童クラブの支援員の方からすれば、教員ではないので指導まで求められても困るといったトラブルが多い。トラブルを解消するために、町の教育委員会の担当者が非常に苦慮しており、6 ページにある、放課後児童クラブや放課後子ども教室の研修会へ参加させていただいている。いの町でも、町内の支援員を集めて特別支援教育についての研修会を定期的に行っているが十分ではないため、支援員の力量を高めていくこと、学校との連携を高めていくことが必要だと思う。是非、効果的な研修をお願いしたい。

【委員】

7つの小学校で10ヶ所の児童クラブを香美市で運営して7年目になる。以前は個別で保護者会が運営していたものを統括運営するようになり、資質向上を一番最初に打ち出し、様々な研修を受けてもらった。支援員から、自分たちのウィークポイントは何なのかを聞き、研修部会でウィークポイントを強化していくような独自の研修プランを毎年行っており、多分、全国でもトップクラスに研修数が多いと思う。

自分自身が一番最初に取り組んだのは、委員が言われたように、学校の問題を放課後児童クラブへ持ってこないでいただきたいといったことであった。

私自身、小学校のPTAの役員を9年間、市P・郡Pにも携わり、学校長とも顔見知りであった。放課後児童クラブの支援員に伝えたことは、運動場で遊んでいる児童について、「あの子は、うちの子ではない。」という考え方をまずは撤廃していただきたいといったことであった。自分たちの放課後児童クラブ、山田小学校であったら山田小学校の全児童を私たちが見守っているといったマインドを持っていたきたいと伝えた。学校では、チーム学校という言葉があるが、放課後児童クラブの支援員は現状ではチーム学校の一員ではないのではないかと、その一員になるにはどうするのか、自分たちが全員を見守るという感覚をまずは持つこと、みんなで見守らなければいけない。1人で運動場に出てきて、土遊びをしている児童がいたら、普段自分たちが関わることがない児童でも、声掛けをしに行っていたきたい。学校との距離を縮めていくためには、自分たちの視点から変えていかないと、学校も放課後児童クラブに目を向けてくれない。自分たちの態度を改めることを各校長先生に伝えてきた。そして、まずは、放課後児童クラブの施設長を学校運営協議会委員に入れていただきたいとずっとお願いし、今かなりの割合で、1人は委員に入っている。

学校側の今年の方角性を知らずに、自分たち独自の方角性で放課後児童クラブを見守っていこうと言うのでは無く、例えば、今、学校側が靴を揃えようとなっているから、放課後児童クラブでも靴を揃えよう、学校側が、目を見て挨拶しようとなれば、放課後児童クラブでも相手を見て挨拶するにしていこう。学校側が目指している方角性を理解し、規範に置いて放課後児童クラブでの教育プランを立てていくのが筋ではないかということ、7年間言い続けて少しずつ足並みが揃ってきた。定期的な定例会についても、最初は少しぎくしゃくしていたが、学校との信頼関係もできてきてスムーズになってきた。

このような関係に至るまで、3年から5年ほどかかった。管理職は3年に1回程度変わっていくため、放課後児童クラブのことは放課後児童クラブでといった考え方の校長先生もかなり多いため、人事異動がある度に学校に出向いている。校長先生には、香美市の放課後児童クラブとしての考えを伝え、チーム学校の一員として、何かできることがあれば協力することを伝えている。例えば、引き渡し訓練を行う際、放課後児童クラブの支援員は保護者と毎日会っており詳しいので、体育館に派遣するので引き渡し訓練を行う際には、放課後児童クラブの支援員も呼んで実施する等の提案をするなど、1つのチームの一員としてまずは認めていただきたいといった取組をずっと行っている。お互いの歩み寄り方が大事であるので、関係性を築くためには、放課後児童クラブの管理者や運営者にも、自分たちが見ている子どもたちだけではなく、小学校全員の子どもたちを自分たちが預かっているといった考え方、そして、学校とのチームワークの作り方を根底から作っていかねばいけないと思う。

【委員長】

委員が言われたように、各放課後児童クラブが自前で研修を行うことや、学校との関係づくりは、とても重要な視点ではないかと思うので、参考にさせていただき、研修事業をよりよいものにしていただきたい。

【委員】

本校は放課後子ども教室のみあり、窓口は校長が行っている。子ども教室の代表の方とは、何かあった際は、電話やLINE等で確認を行っている。夏休み、出前講座等もこまめに申込みをされていて、夏休みの活動や利用した講座、子どもたちが作った作品の情報もこまめに送ってくれ、様子がわかるようになっていく。

長期の休みには、担任の先生方にも一度は放課後子ども教室に様子を見に行き、あけてと声掛けを行っている。小さな学校だがトラブルもあるので、スクールカウンセラーの方を、学期に一、二回ほど派遣をし、支援員の方の相談にのるということを定期的に行っている。

2ページにある資質向上研修は放課後子ども教室と放課後児童クラブの方向けの研修会だと思うが、参加人数に対して満足度は大変高いと思う。県内にどれぐらいの支援員の方がいて、どれぐらいの割合で参加しているのか。参加した方は熱心で、もう少し子どものためにどうにかしたいといった気持ちや困りごとがあるため、自ら参加し、さらに資質を上げてもらうと思うが、参加率がどれぐらいなのか。学校ではないので放課後子ども教室や放課後児童クラブから1名以上参加していただくような悉皆研修ではないと思うので、自由参加の場合、どれぐらいの方が参加しているのか。それぞれ、大切な研修計画を立て行っている中で、市町村別もあると思うが、どれぐらいの参加を予想しているか。参加してもらいたい人数や呼びかけ方法、これぐらい参加が毎年増えている等あるか。

【生涯学習課】

放課後子ども教室137ヶ所、放課後児童クラブ188ヶ所あるのだが、人数に関しては、本当は全教室・全クラブから参加していただきたいと思っている。研修会に参加する際の旅費や支援員の方々への謝金の関係で参加が難しい自治体があることは把握をしているので、現場の方が来てもらえない所に関しては、自治体の担当者に参加していただくようお願いし、参加した内容を現場の方に共有していただきたいと伝えている。最低でも、全市町村には来てもらいたいと考えており、各市町村のヒアリングや個別に担当者へ電話連絡をするなどして参加をお願いしているが、子どもとの関わりに困っていると伺っている現場や自治体に関してはあまり参加してくれていないという現状である。

【委員】

香美市の方は、統一運営になったため一元管理で放課後児童クラブを運営しているのだが、他の自治体は1年間同じ支援員の方がずっと行い、外部のクラブを見に行くことはないのか。

【生涯学習課】

自治体によるとは思うが、ない所も多いと思う。

【委員】

放課後児童クラブの運営を始めた際、総主任というポストを作り、必ず全放課後児童クラブを見に行き、いただくようにした。総主任も所属する放課後児童クラブがあるが、行けるように代替の職員をそこに置いたりとか、人員スワッピングをしながら全部の放課後児童クラブを見守り、各放課後児童クラブのウイークポイントを把握をした上で、研修したり注意したりしてしている。最近では、巡回支援員に関する制度の補助金をもらい、巡回支援を行っている。少し問題がありそうな放課後児童クラブには重点的に通い詰めたり、問題に沿った研修を実施したり、次の研修は絶対参加した方が良くと後押しを

行っている。単独で行っている放課後児童クラブは、この取組は難しいと思うので、自治体が公費で巡回支援員やアドバイザーのような方を置き、全放課後児童クラブを回るようにし、弱いポイントがあるので、次の研修を受けていただくよう促すと研修会への参加が今より増えるかもしれない。

しかし、1回目に行った際に失敗したことは、総主任が指導し始めた。すると、職員が閉鎖的になり、何か注意される、何か査定されるといったように見られるため、人間関係が悪くなったということがあったことから、アドバイザーとして行き、一緒に子どもを見守り、褒めて伸ばすように伝えた。指導は現場に行った際に行うのではなく、課題である事に関しては、全体への研修や注意事項で気をつけるよう促すなど、全員に訴えるようなやり方をし、クラブを名指し、指導することは止めるようにした。自発的に気付くような機会を作り、先日受けた研修の成果が活きているから、素晴らしいといったような支援を行っているので、単独で行っている自治体があれば、巡回アドバイザーみたいなものを置き、見守っていくという仕組みは、放課後児童クラブでは様々な問題があるので良いと思う。

(2)「子どもの「確かな学力、健やかな体、豊かな心」の育成に向けたコミュニティ・スクールのあり方について」

【委員長】

本日の協議テーマについて、学校と地域が関わることによるメリットについて協議していただきたい。誰にどのように良いことがあるのか、委員の方々のフィールドに即してメリットを紹介していただきたい。協議資料の裏面にある、関連する本県の施策や基本情報に、コミュニティ・スクールと地域学校協働活動の一体的な推進においては、子どもの課題解決に取り組むことに、非常に有効だということが、記載がされており、子どもの課題解決に取り組み改善・解決につながった学校の割合が、89.1%で約9割あったという、アンケートの結果もある。これも、1つの学校と地域が関わることのメリットなのかと思うが、こうしたことも踏まえ、ざっくばらんに協議していただけたらと思う。皆様が出していただいたご意見は、推進委員会として、県内の学校へのメッセージにも、繋がっていく。形骸化している学校運営協議会や地域学校協働本部があれば、そのようなところにメッセージとして発信していけるのではないかと考えている。

【委員】

本校も人事異動があるため教職員が変わるので、まず教職員に地域の人たちを知ってもらう形をとっている。他にも、年度が終わる際に、どんなことを地域の人が助けてくれて良かったと思うか教職員で出し合っている。みんなで出し合うと、例えば梅の実について学んだ際には、梅がないのに地域の方みんなで探してくれて、しかも1年生でも手の届く所の梅の実を見つけいただき、凄く助かり、生身の体験ができたことが意見として出た。このようなことを教職員は、普段地域の方がどれだけ関わってくれているのか365日の中では忘れてしまう。土佐山学舎の場合、地域の関わりが強いため、地域の方がやってくれて当たり前、去年もやってくれたので今年もやってくれると思っている方もいるかもしれないが、そうではない。梅を大事に育てている地域の人たちが、子どもたちのためにやってくれてるんだということに、教職員が気がつくことが大切で、地域に感謝を持つのは、まずは教職員だと私は思っている。

子どもたちはとても素直で、その場で地域の方と面と向かって教えていただくことができる。どこの学校でも取り組んでいると思うが、自分の学校は失敗を重ねてきたからこそ、意識を一つにベクトルを合わせるためには教職員に気付いていただく時間が必要だと私は思っている。

【委員長】

確かに地域の方がやってくれるのは当たり前ではないということを、自覚することが大事である。

【委員】

学校は地域にお願いしながら協力していただくことが多く、子どもたちが何を地域に返せるか、これから考えていかなければいけないという事は私の課題でもあるのだが、コミュニティ・スクールとしても昨年度から東又小学校でも取り組み始めたところである。昨年度のこの会議でも熟議の大切さを学ばせていただき、昨年の12月に子どもと地域、それから教職員全員が参加するワークショップを始めた。昨年度は、学校運営協議会で相談した目指す子ども像を三者が集まるワークショップで投げかけ協議をし、承認を経て昨年度、子ども像を決めたのだが、今年の12月に、ワークショップの中身をどうしようかということになり、中身の相談も学校運営協議会で行った。

地域の方は子どもたちとどのような話をしたいのか聞いたら、東又地域のどのようなところが好きか聞きたいといった意見や、子どもの夢を聞いてみたいという意見があった。12月の学校運営協議会と、東又子どもを守る会という地域学校協働本部の会で、地域の方が30名、児童が6名、そして全教職員をグループに分け、それぞれテーマに沿って熟議を行い、熟議の内容を共有したり、教職員がまとめたといった内容のワークショップを今度考えている。子どもの生の声を聞けるところが、この場が一番あるのかなと思っている。

日常的には、読み聞かせに年間20回と加力指導に放課後年間20回程度、民生児童委員の方に来ていただいているが、ざっくばらんに話し合う機会はこの場面ということで、12月を予定している。子どもたちから聞いたことで、すぐできること、来年以降できること、大きな夢と分類しながら、取り組んでいきたいと思っている。委員からもあったように、地域への感謝は忘れがちだと思う。地域が熱心で、お父さんもしくはお母さんのどちらか、祖父母も東又の出身の方が多く、地域の見目、それから温かさとか厳しさを持っている学校である。昨年度は興津小学校との統合もあったので、興津の良さも保ちつつ、それぞれの良さを拾い上げながら、今後話し合いも考えている。

感謝の気持ちを少しでもすぐ伝える方法としては、読み聞かせを担当した方に、「〇〇さん読み聞かせありがとうございます。よろしくお願いします。」と黒板に一言お礼のメッセージを必ず書き、子どもたちにも誰が来てくれるのか伝え、先生の気持ちも伝えてもらいたいと思い、書いていただくよう統一している。

また、働き方改革とも関係してくるのだが、読み聞かせを行っていただく際、数年前は、担任は教室にいているようにしていたのだが、担任としては読み聞かせの10分の間も大事で丸付けをしたいとのことであったので、教員の意見を聞いた。6月の1回目のスタートは教員も一緒に読み聞かせに参加し、以降の読み聞かせの際には、担任は職員室で丸付け等の仕事していいというようにした。

【委員長】

感謝の気持ちを示すことに関しては、メリットの自覚になり大事なことである。また、子どもと一緒に参加するワークショップも子どもの気持ちや考え等、生の声が聞こえるので良いと思う。資料にある土佐町についても、子どもを巻き込んだ拡大熟議が行われると記載されており、色々な地域で子どもを巻き込んだ拡大熟議やワークショップが行われている。

【委員】

本校は6小学校が校区にある。関わっている子どもが、中学生で思春期なので一筋縄にはいかない。3年間でも一定の効果はあるが、勿体ないため6小学校に頻繁に出向いている。小学生の6年間に寄り添えば9年間関わることができ、親和性も高まり本音も聞くことができる。これまで、関わりのあった30歳以下の土佐市の方はお互いに大体知っている。例えば、小学校の児童や中学校の生徒は地元の子どもといった雰囲気があるが高校生になると、高知市内の高校に通っている生徒が圧倒的に多くなるため、地元の雰囲気が急激に無くなる。9年間の関係性があるため、高校生と関わる機会が多いのだが、小・中学校の出身校を含めて地元が大好きで、必ず地元で何かしたいと言っている。現役の高校生と話す機会があるので、その際に、小・中学校から見たらあなたたちも地域の一員であるので、地域として関わったどうかと伝えている。メリットかどうかかわからないが、高校生であれば、小学校の土日行事で焼き芋大会もあるので、積極的に地域として入ってきていただきたいと伝えたり、中学校のキャリア教育の見学に来たらいいよと伝えておくと、結構参加する学生がいる。小・中学校で地域学校協働の取組をしてくれているおかげで、本来、高校になったら地域貢献が難しい面をこの活動によってできている。事業のことを知らないといけないので、小学校、中学校で関わっている際に、もっと宣伝しないといけない。

【委員】

市町村教育委員会の立場として、コミュニティ・スクールをどのように広めていくかという視点で少し、お話をさせていただきたい。ただいまお配りしたパンフレットを見ていただくと令和7年度の本町の教育ビジョンを示し、年間の重点的な取組を示したものになる。1回目の校長会で私がこの資料で説明し、全ての校長先生が必ずPTA総会で説明することになっている。見開きの一番右側「PROJECT 04 地域とともにはぐくむ」が関係する。

いの町としても、様々な教育課題があるが、教育課題を改善するために、学校だけの力では当然ながら限界があり、保護者・地域の力を借りるということで、地域とともに育むプロジェクトということを4番目に立て、今年は大きく3つの取組を進めている。一番上が、家庭学習の充実を図っていくために基本的な生活習慣であり、下にあるデータが令和6年度の全国学力・学習状況調査の家庭学習時間で、小学校6年生と中学校3年生の全国、高知県、いの町の状況を示したものになる。いの町は赤字で記載があるが、このような課題が家庭学習で見られるというふうに知らせている。家庭学習の課題を改善するために、2として、コミュニティ・スクールと地域学校協働本部の一体的推進の右側の吹き出しにある、「令和7年度はすべての小中学校で基本的な生活習慣の確立について、熟議を行っていただく予定です」と、町の課題に対し、各学校ごとではなく、学校一斉に熟議のテーマを決めて、11校全てが1回は必ず基本的な生活習慣をテーマにして熟議を開くといった形で取り組んでいる。町の課題として、保護者も関心も持ち、教員は当然ながら、全てのPTA、保護者、そして、地域学校協働本部の委員の皆さんにパンフレットを配っている。1つのパンフレットを土台として、みんながいの町の課題を共有しながら、「学校としてはこういうことができるのかな」という形で今進めている。

すでに来年のテーマは、インターネットの利用に決めている。今回の調査でもインターネットの利用についての項目がかなり厳しい数値が出たので、香美市や香南市がやられている、ネット宣言のようなものをいの町でも作るということで宣言の策定のための委員会を、保護者の方に関わっていただき作っている。来年度はPROJECT 04に落とし込み、町を挙げ、ネットについて考えることを来年また熟議で行いたいと考えている。教育委員会とすれば、町としての取組方針をしっかりと伝えていくことが役割と思っているので、メリットは、町全体の教育課題の改善に向け、1つ組織として活用できること

がメリットではないかと思う。

【委員長】

私は伊野南小・中学校の学校運営協議会の委員をしているのだが、どうしてスマホの問題に関する熟議が始まったのか理解できた。学校運営協議会で熟議を行い、行った内容が町の施策になっていくというのは、市町村の教育課題の改善にも繋がる１つのメリットだということを改めて感じた。

【委員】

記載のある事例は先ほど資料の８ページにあった。令和６年度版に出した５年度の実績を掲載させていただいている。その際は、土佐町中学校には教職実践高度化専攻の教員が在籍しており、地域学校協働本部のことを専門的に学んでいた方に学校運営協議会に入っていただき、ＣＳポートフォリオ等使いながら取り組んだ令和５年度であったので、記載の取組ができたという実績がある。本来は拡大熟議を行い、その後どうであったかということを昨年度、もう一度熟議として展開したかったのだができなかった。コミュニティ・スクールの見える化であるＣＳポートフォリオを使えば、教職員からの地域への感謝等を数値化して目に見えたり、信頼関係を育むとかいうところでも、メリットとして使えたりするのではないかと考えている。

また、冒頭にお話があったように、教職員に地域学校協働本部事業を知っていただくことで、仕事が増えるような話があったが、正しく地域学校協働本部事業を理解していただけたら、教職員が担わなくて良い事務分担を地域の方に担っていただけるので、単純に、教職員の働き方改革に上手く繋がっていき、学校と地域と一緒に地域の子どもたちを育むことに繋がっていくのはではないかと思う。学校運営協議会の担当からすると、コミュニティ・スクールという言葉が合致していない部分があり、年間回数が２、３回程度の学校運営協議会は学校評価のことばかりの協議になっているのではないかと感じる。それではいけないということを今日勉強させていただいた。例えば、学校運営協議会で協議し、承認しないといけないこともあるが、それ以外でこのコミュニティ・スクールに繋がるような、議題や内容、どのように市町村は取組を学校運営協議会で行っているのか、県教委から流していただければ、各市町村は非常に良い学校運営協議会になっていくのではないかと思う。

【委員長】

まだまだ、学校運営協議会とコミュニティ・スクールがイコールだという理解が浸透していなかったり、或いは以前の学校評議員との関係性もうまく整理されてなかったり、ということがある。

【委員】

土佐町には実践部隊として学校応援団という組織が別にあることから、本当は学校応援団と一体的な取組をしていかなければいけないが、国が求めているような一体的になっているのかなと課題を感じた。

【委員】

平成２７年から学校運営協議会を行っている中で課題として出てきたことは、地域の方と子どもを巻き込みながら、地域学校協働本部と連携・協働して取り組んでいるのだが、保護者は何となく学校が地域の方と一緒にやってみたいな感覚が少しあった。この点に関しては、解決しないといけないということで、文化祭は、９９％ぐらいの保護者が来るので、その中で、子どもと地域の人と一緒に、地域学校

協働本部の3つに分けている取組を発表するようにした。地域の人に子どもがインタビューしながら、保護者の方全員に見てもらい、地域の方との取組を理解してもらうことで、子どもと地域でやっていることも知ってもらう。学校便りも出すが、紙の中ではなかなか理解してもらえないので、熱情的な部分と顔を知ってもらうという部分に関しては、反省も踏まえた中でできてきた。従って、誰にこのメリットを知ってもらいたいのか、本校の場合は保護者に知ってもらいたい。土佐山学アンケートで感謝をしている肯定群がいつも100%あるのだが、学校運営協議会だけではなく、学校だよりは、地域にも発行するので、地域の方にも学校側は感謝していると思ってもらえるように返している。どこへメリットを発信するかによって方向が変わってくると思った。

いの町のパンフレットは凄く良いと思っている。課題を、学校運営協議会でも、本当の実情を知ってもらうことは大事であると思ってるので、良いことばかりだけではなく、学校はこんなことで子どもたちが困っている、学力や他の面でも困っているということを学校運営協議会の委員の方に説明することは大事なことであったらと思う。

【委員】

課題は親にもある。親がどうにもならない環境で、子どもにも影響が及んでいるケースがある。対応を教員にやってもらうわけにはいけないので、学校運営協議会から派生したボランティアのような形で動いている。アプローチを上手く行えば、話もきちんと聞いてくれ、課題を断ち切ることができるので、その部分を受け持つのが地域ではないかと言う内容を学校運営協議会で行い、教員には勉強を教えてもらい、地域は生活指導をしようとなった。これは、学校運営協議会の醍醐味でもあると思う。

【委員長】

本日は学校と地域が関わることのメリットについて協議してきたが、学校と地域が関わることで色々なメリットがあるという前提のもとで、メリットを誰に知って欲しいか、いかに広げていくか、発信していくかといったところまで協議の内容が広がった。また、地域・学校・行政それぞれの立場で、学校運営協議会の活用の可能性や、学校運営協議会を拠点にいろんなメリットを作っていく可能性についても、それぞれの立場で示唆していただいたのかなと思う。

本日は活発にご意見やご質問、ご感想など、いろいろ出していただきありがとうございました。それでは協議の時間はこれにて終了とさせていただきます。